
孤独な少年 V S ドラえもんズ

及村翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な少年VSドラえもんズ

【Nコード】

N1925D

【作者名】

及村翔

【あらすじ】

敵は友情を憎む孤独な少年！始まるロボットの暴動！のび太、静香、スネ夫、ジャイアンも参戦！不滅の友情に亀裂が入る！？ドラえもんズは敵を倒せるか！？

第一話 ドラニコフとの出会い、未来の事件（前書き）

擬人化＋オリジナルキャラが出ます。

苦手な方は閲覧注意。

第一話 ドラニコフとの出会い、未来の事件

前書き

この話ではドラえもんズが擬人化致します。
許せない方は見ない方がいいです。

時は22世紀

ロボット達は全て人型に改良される計画が行われた。

ドラえもんズもそれは例外ではなかった

計画が終了した後

ある一人の少年科学者が姿をくらませた

彼は友情を憎み、信頼を嫌う者だった

彼は

不滅の友情を持つドラえもんズが憎らしかった

彼の心に秘められた思いは

彼等ドラえもんズの友情を壊し

彼等を“壊して”しまおう…

だった

桜の花が舞い散る季節

野比のび太は無事高校生になった。

ジャイアン、スネ夫、静香も同じ学校だ。

今日は、久しぶりにのび太の家で遊ぶ事になり、のび太は一足先に家に帰っていた。

「ただいまあ！」

両親は親類の結婚式やらで3日は帰ってこない。今家にいるのは小学校5年生の時からお世話になっている猫型…いや、現在は人型ロボットのドラえもんだけだった。
階段を上がり、自分の部屋の扉をあける。

「あ、おかえりのび太くん」

部屋にいたのはやはりドラえもん。

青髪のショートヘアで黒い瞳、青と白のパーカーに水色のズボンを履いている彼はいつものように壁に寄りかかって漫画を読んでいた。

「今日、静香ちゃん達が来るんだ」

「そうなんだ。久しぶりだね」

ドラえもんとは呑気な話をしているとふいに机の引き出しが開き、中から人が出て来た。

出て来たのは茶髪に真っ白な肌の細身の青年だった。

耳の下あたりのショートヘアで紅い瞳、服装は春なものにも関わらずマフラーをしていて暖かそうな服を着ている。

「あ、ドラニコフ!」

ドラえもんが嬉しそうに顔を向ける。

どうやら知り合いらしい。

「……はじめまして…僕…ドラニコフ…ドラえもんとは親友……よろしく…」

のび太より15cm以上高いドラニコフは恥ずかしそうにマフラーで口元を隠しながら右手を差し出す。

のび太は戸惑いながらも右手を出し握手する。

「でも、どうしたの？ドラニコフが来るなんて」

ドラえもんは不思議そうにドラニコフをみやる。

ドラニコフが口を開こうとした時にインターホンになる。

「あ、静香ちゃん達だ」

のび太が玄関にむかい、静香達を部屋に招き入れる。

静香達は驚いていた。

無理もない

部屋にいるのはドラえもんの他、整った顔立ちをした白人の青年がいるのだから。

「みんな、彼はドラえもんの親友でドラニコフって言うんだよ」

「はじめまして……ドラえもんとは同じロボット学校に通ってたんだ…。今は…ロシアで人助けとか…ハリウッドで映画俳優やってる

……」

静香はやや顔を赤くしていたようだ。

映画俳優だかルックスがよく、声もとても澄んでいるのだから。

のび太は少し面白くなかった。

「ああ！僕知ってる！」

スネ夫が急に大声を出す。

「あの有名なスーパーウルフマンシリーズで主演してる有名俳優だよ！」

「ああ、ドラニコフは僕と同じ時代で映画の仕事してるからね」

ドラえもんが納得したように言う。

ジャイアンは

「そんな有名人と知り合いなんてすげーな」とドラえもんを見ている。

「あ、そうそう。なんで来たんだっけ？」

ドラえもんがドラニコフに再び向き直る。

「……大変な事があったんだ……」

ドラニコフは少しうつ向いて話す。

「僕等を人型にした科学者の一人が行方不明になった。…そして、ロボットが暴動を始めたんだ」

第二話 同行願い（前書き）

擬人化、オリジナルキャラあります。

第二話 同行願い

「『ロボットの暴動!?!?!』」

「うん。22世紀では、ロボット達が様々な暴動を起こしていて、僕等を狙ってるんだ」

驚く4人にドラニコフが説明する。

「他のみんなは平気なの?」

心配そうに口を開くドラえもん

「みんなは、22世紀にいなかったから、影響はないみたい」

「よかった……」

安心したように座りこむドラえもん

「『みんな』って？」

不思議そうにスネ夫が尋ねる。

「僕の親友だよ。僕とドラニコフを入れた7人で、僕等はドラえもんズって言われてるんだ。不滅の友情を誓い、7人でいろんな事件を解決したんだ」

「まあ… 8割りは校長先生に騙されたよね…」

自慢気に話すドラえもんに対し、ドラニコフはやや遠い目だ。

「その7人は、ドラちゃんと学校の頃からの知り合いなの？」

静香がそう尋ねるとドラえもんは頷く。

「だから、みんな、悪いんだけど、ドラえもん借りてっていいかな？」

ドラえもんの服の裾を引っ張るドラニコフにドラえもんは「僕、物じゃないよ」と苦笑いしていた。

「なあ、ドラニコフ」

ふいに、ジャイアンが口を開く。

「俺等にも手伝わしてくれ」

「そつだよ、聞いちゃったからには黙ってられないよ!」

ジャイアンに賛同するようにのび太もドラニコフに訴える。

静香もスネ夫も頷いている。

「でも、危ないし、君達は人間だから、もし何かあったら……」

ドラニコフは困ったようにやんわりと拒否する。

「ねえ、ドラニコフさん。お願い。私達、協力したいの」

静香がドラニコフに詰め寄り、ドラニコフを見上げる。

ドラニコフは相変わらず困ったように拒否する。

その様子を見て、スネ夫は何かを思ったのか、静香に耳打ちする。

スネ夫に何かを言われた静香はより一層ドラニコフに詰め寄る。

「ねえ、お願い。絶対に迷惑はかけないから、お願いします」

のび太とジャイアンは頭に？マークを浮かべたがドラえもんは納得したように見ていた。

「……………わかった……………でも、言われた事は守ってね……………」

ついにドラニコフが折れた。

「おいスネ夫、どういう事だよ」

ジャイアンが不思議そうにスネ夫に聞く。

「前、雑誌に書いてあったんだよ。『ドラニコフはうまく断れないタイプ』って」

「あ…」

思い出したようにドラニコフが声を上げる。

「よしっ！これで俺達も行けるな！なら、さっそく行こうぜ！！」

ジャイアンが楽しそうに言うがドラニコフはそれを制した。

「今、行っても準備が出来てないから、危ないよ」

「ねえドラニコフ、まだ本格的に始まったワケじゃないんだよね？」

ドラえもんがドラニコフの顔を覗き込む。

ドラニコフは首を縦に振る。つまりはYes。

「よし、じゃあ今日は明日のためにゆっくり休んで準備しよう!」

「あ、ならみんな僕ん家に泊まっていけばいいよ。ドラニコフ、君も泊まるでしょ?」

ドラえもんに次いでのび太も発言する。

みんなも特に反対するワケではないので、のび太の家で一夜を過ごし、明日の朝、出発する事にした。

第三話 一夜の夕飯（前書き）

捏造設定あり、気をつけてください。

第三話 一夜の夕飯

明日、他のドラえもんズのメンバー達を探しに行く事になったのび太達は現在、のび太の家で一夜を過ごす事になった。

場所は台所。台所に立っているのは静香とドラニコフ。

二人で夕飯を作るようだ。

「ドラニコフさんは、好きな食べ物なんですか？」

静香がエプロンをつけながら尋ねる。

「んと……、温かいスープ系が好き」

「じゃあ、クリームシチューにしましょうか」

「でも、みんなの意見は？」

ドラニコフは上を見上げる。恐らく、みんなの意見を聞きたいのだろう。

「大丈夫よ、みんな何であつても食べてくれるから」

静香はそう言つと野菜を準備し始めた。

ドラニコフも、彼女に続き、調理を始める。

「でも、ビックリしたわ。ドラちゃんの知り合いにこんな有名な人がいるなんて」

ドラニコフがじゃがいもの皮を剥いている最中、静香は人参を切りながら喋る。

「…ドラえもんズは、知られてないけど、凄い特技を持った人の集まりだから」

こうして、静香とその他愛もない会話を楽しみながら、夕飯作りは続けられた。

「みんなー、ご飯出来たわよー」

静香が階段の下から呼ぶ。その姿が母親のように見えて、ドラニコフはクスリと笑った。

食卓に全員が座ると、誰が合図するワケでもなくみんなで挨拶をし、食べ始める。

「あれ、ドラニコフって左利きなんだ」

のび太がドラニコフのスプーンを持つ手を指差す。

「なんでだろ、昔から、左が使いやすいんだ」

「そうなんだ〜……………げ、人参」

自分のシチューに目をむけたのび太は嫌そうな顔をする。

シチューに入っているのはのび太の嫌いな人参。

「あ、ごめんなさい。小さく切るの忘れてたわ」

静香が

「残してもいいから」と謝る。しかし、ドラえもんは食べると言わんばかりに見ている。

のび太がどうしたらいいか唸っていると

「人参、もらって、いい？」

ドラニコフが助け船を出してくれた。

「え、食べてくれるの？」

「うん」

「ダメだよ、ドラニコフ。のび太くんを甘やかしちゃ」

ドラえもんはこれも成長のため、と言う顔でドラニコフを見る。

「代わりに」

「？」

ドラニコフの言葉に首を傾げるのび太

「サラダの、ゆで卵、食べて」

ドラニコフが指指した先にあるのはドラニコフの分のサラダ

見事にゆで卵だけ残っている

「ゆで卵、嫌いなのか？」

ジャイアンが聞くとドラニコフは頷き
「ボソボソしてて苦手」と言った

のび太は二つ返事で了解し、ドラニコフのゆで卵を食べた。

ドラニコフはお礼と言うような感じでのび太の人参を食べる。

「ドラニコフ、昔からゆで卵だけは食べないよね」

「感触が、ヤだ」

ドラえもんとドラニコフが昔を懐かしむように話し出す。

聞いてると面白そうだと思ったのか、4人は静かになる。

「もしかして、のび太くんの人参食べたのってキッドの事があったから？」

「ご飯の時、いつも『食べてくれ』って言われたから」

「ドラニコフってば、ゆで卵以外に嫌いな食べ物ないからみんなに食べてって言われてたよね」

「うん、貝とか、オクラ、納豆、ピーマン、玉葱……人より食べた気がする」

「でも、ドラニコフってば中々太らないもんねー。女の子達羨ましがってたね」

「僕は、筋肉があまりつかなくてヒョロっとしてたから嫌だったけどね」

二人の会話を聞いていると、今ロボットが暴動を起こしているとは思えないくらい落ち着いた。二人は二人の会話を聞いていると、今ロボットが暴動を起こしているとは思えないくらい落ち着いた。

しばらくして、ごちそうさまをした後に洗い物をして、明日に備えて寝る事になった。

いよいよ明日、他のドラえもんズのメンバーに会えると思うとのび
太は中々寝付けなかったそう。

第四話 中国4000年究極のカンフーマスター王ドラ（前書き）

オリジナル設定ありの擬人化。

王ドラのキャラが壊れます。

第四話 中国4000年究極のカンフーマスター王ドラ

朝、のび太が目覚めた時にはもうみんな起きていた。

ドラえもとドラニコフから言われた守らなきゃいけない事は二つ

無茶はしない

危なくなったら誰かの後ろに隠れる

これだった。

のび太達が了解すると、二人は納得し、タイムマシンに乗り込む。

のび太達もそれに続く。

ドラえもんがタイムマシンのスイッチを入れる。

「最初に、誰の場所に行く？」

ドラえもんがドラニコフに尋ねる。

「ここからなら、まず、中国に向かおう」

ドラえもんは了解すると、タイムマシンを出発させる。

目指すは、仲間の一人がいる国、中国。

中国につくと、そこは地獄のようだった。

仲間がいるらしき竹林は焼け野原になり、動物の死骸もたくさんある。

恐らく、暴動を起こしたロボットのせいだろう。

「ひどい……………」

静香が悲しそうに動物を見る。

「…王ドラはどこだろう？」

ドラえもんは辺りを見渡す。

すると

「あちよー!!」

遠くない場所で、声が聞こえた。

「王ドラだ!」

「王ドラ?」

「僕等の親友!ドラえもんズの仲間さ!」

首を傾げるスネ夫に簡潔に説明したドラえもんはドラニコフと共に
声のした方に走って行く。

4人も後を追うように走って行く。

ドラえもん達がむかつた先にいたのは、ロボット相手に一人で立ち向かう人型ロボットだった。

橙色の膝までの長い髪を後ろで丁寧に三ツ編みにし、赤い中国帽に袖の長い赤い拳法着を着た小柄なロボット。瞳は翡翠色をしていて頭には豪華な花の簪をつけている。

一見すると女の子のような外観をしている。

そのロボットはヌンチャクと蹴り技を巧みに操りロボットを一体ずつ破壊していた。

するとドラニコフがそのロボットにむかって走って行く。

「王ドラー！」

王ドラと言われたロボットはドラニコフを見ると驚いたような顔をする

「ドラニコフ!？」

ドラニコフは王ドラの隣に立つ

「手伝うよ」

その時、ロボットの丸い部品がドラニコフの視界にうつった。

一瞬、場の空気が変わった気がした。

ドラニコフの穏やかな目付きは吊り上がった目付きへかわり、瞳の色も金色へとかわっている。

爪も長く、かたいものになり、ニヤリと笑った口元には尖った歯が見えた。

「久々に暴れるぜえ、行くぜ!王ドラ!!」

言葉使いも荒々しくなっている

「足、引つ張らないでくださいよ」

「誰が引つ張るかよ」

二人の戦闘を、ただ見ているだけの4人はドラニコフの変わりように啞然となる。

「ドラニコフは、丸いものを見ると人格が変わるんだ」

食器はセーフだけどね。とドラえもんが言う。

一方、戦闘中のドラニコフは懐からタバスコを取り出し、1ビン飲み干す。

すると、ドラニコフは火を吹いた。

「あ、ドラニコフは辛いものを食べたら火を吹くんだ」

「「「「すーっ！」「」」」」

ロボットが全て焼け焦げ、戦いは無事に終わった。

「王ドラ！ドラニコフ！」

ドラえもんが二人の元に走る。ドラニコフは元に戻ったのか、穏やかな顔つきに戻っている。

「ドラえもん！ お久しぶりですね。………後ろの方達は？」

王ドラがのび太達を見る。

「僕、野比のび太。よろしく王ドラ」

「私、源静香」

「僕、骨川スネ夫」

「俺、剛田武。ジャイアンて呼ばれてるぜ」

全員が自己紹介をし、のび太が王ドラに手を差し出す。

王ドラは少し戸惑ったが、のび太の手を取り、握手した。

「王ドラと言います。ドラえもん、ドラニコフとはロボット学校時代からの親友です。……あと、誤解される前に言いますが私は男です」

「「「男！！？？」」」」

王ドラの発言に驚きを隠せない4人。

ドラえもんは爆笑、ドラニコフは苦笑いをしていた。

「な、何が可笑しいんですか！」

王ドラは真っ赤になりドラえもんを睨む。尚、まだのび太と握手したままだ。

「だ、だって…背がちっちゃくて、声が高くて、女顔で、花の簪なんかしてたら誰だって女の子だって思うよ」

ドラえもんが笑っている中、のび太は王ドラの手を見てみた。

近くで見れば、白くて細い指。やや下を見れば、ゆったりした白のズボン。そこから手と同様白くて細い足が見える。

この足で巨大なロボットを蹴り飛ばしていたと考えると背筋がゾクツとなった。

「あの、いい加減手、離してもらえませんか？」

王ドラの言葉にハッと、手を離すのび太

「ところで、ドラえもん。何故彼等を連れて来たんですか？もし、事件に連れて行くのであれば、戦闘が出来ない彼等は危険ですよ」

王ドラは4人を見て、ドラえもんの方を見た。

「それ、俺達が足手まといって言いたいのかよ」

ジャイアンがムツとしたように王ドラを見る。

王ドラの言い方が気に入らなかつたようだ

「私は正しい事を言っただけです。私達はロボットですが貴方達は人間です。ロボット相手には危険すぎます」

王ドラはハッキリと言い放つ。

のび太達は何も言い返せない。

ドラニコフは、少し考え、4人に耳打ちした。

4人は顔を見合わせ、ニヤリと笑うと王ドラを見た。

「な、なんですか？」

少し後退りする王ドラ

その瞬間、のび太、スネ夫、ジャイアンに取り押さえられた。

「な、何をするんですか！！」

状況がつかめない王ドラは3人の顔を見るだけ。

「ねえ王ドラさん、私達、迷惑にならないようにするからお願い！」

静香が目の前で王ドラに願う。

「！！わ、わた、私っ…女の子は苦手なんですっ！！！！」

王ドラが顔を真っ赤にして叫ぶ。

4人は心の中でガッツポーズ

ドラニコフが教えたのは、王ドラの弱点。

「あがり癖がある、そして女の子に弱い」

それを4人が聞いて、この作戦を決行したのだ。

「ダメかしら？王ドラさん」

静香がドンドン近づいてくる。

「う…………ふえ…………あの…………それは…………」

「王ドラさん」

「……………！わか、わかりました！…お願いですから少し離れてください！…」

王ドラが折れた。

ドラえもんは

「なるほどそういう手があったのか」と納得している。

「やったぁ！ありがとうドラニッコフ…」

「みんなの目が、本気だったから」

ドラニコフはニコツと笑う。

「そっぴやよ、王ドラって小さいな」

ジャイアンの一言で王ドラがピクツと反応する。

「あ、本当だ。僕より小さい」

それに気付かないスネ夫もジャイアンに相づちをうつ。

「この身長だったら小学生くらいだねー」

のび太も王ドラを見ながら言う。

「「「「!?!?!?」」」」

王ドラが泣き出した。しかも大声で。

「王ドラは、小さい事をたくさん言われると大泣きするんだ」

「先に言つてよドラえもん!!」

「わ、王ドラ!悪かった!!」

「うつ…ひつく…どうせ…私なんか…私、なんかあ…ふええええええええええん!」

「言い過ぎちゃったんだって!ごめん王ドラ!」

「王ドラさん、泣き止んで、お願いだから！」

王ドラが泣き止んだのは30分後だった。

第五話 スペインの赤き情熱の怪力闘牛士エル・マタドーラ（前書き）

流血？あり注意

第五話 スペインの赤き情熱の怪力闘牛士エル・マタドール

やっと王ドラは泣き止み、次の場所へ行く事になった。

「うっ……………ひぐっ……………」

「王ドラ」

まだ少し泣いている王ドラを連れ、タイムマシンに乗る。

「次、どこがいいかな？」

ドラえもんが王ドラとドラニコフを見る。

「うーん……………誰か
「スペインです」

ドラニコフの言葉を遮り王ドラが行き先を指定する。

「あの昼寝好きの事です、ロボットにやられてるかもしれませんが
急ぎましょう」

ドラえもんはドラニコフは納得したように頷く。

「よし、じゃあスペインに行こう!」

ドラえもんがタイムマシンを発進させる。

「王ドラ、優しいんだね」

ふいに、のび太が王ドラに話しかける

「何故です？」

「だって、心配だからスペインに行くんですよ？」

「……別に、そういうワケではありません」

二人の会話もそれなりに、むかうはスペイン

スペインに着くと、人はいなかった。

「人がいないね……」

スネ夫が辺りを見渡す。

「恐らく、ロボットの暴動により避難したのでしょう」

王ドラは周りを見ながら歩き出す。

ドラえもん達も、王ドラに続く。

その時だ

目の前を何かがものすごい速さで通りすぎた。

その

「何か」は家にあたり、地に倒れた。

よく見れば、人だ。

しかし、傷口から流れるのは血に似ているが、赤いオイル。

ロボットだった。

真紅の髪を後ろで一つに結び上げ、マタドールの衣装を着ている。

瞳の色は薄紫色で、左目の下には黒子がある。

右手にひらりマント、左手に闘牛用の剣を携えた男はドラえものの仲間。

怪力を誇るマタドール、エル・マタドールだ。

「マタドール!」

ドラえもんがマタドールに駆け寄る。

「お、ドラえもん……それに、ドラニコフに王ドラか。久々だな」

傷を気にせずに笑顔で手を振る青年に王ドラの蹴りが入った。

「この馬鹿！！何怪我してるんですか！！怪力しか取り柄がないくせに！！」

王ドラの一言に、マタドーラの額に青筋が立つ。

マタドーラはフラリと立ち上がると王ドラの頭を右手で鷲掴みにし、顔を近づけ睨みつける。

「怪力だけが取り柄かどうかは、俺の戦いを見てから言えよ、おチビさん」

マタドーラはそれだけ言うと敵であるロボットの前に立つ。

しかし、右足を負傷している彼にはいささか不利なのかもしれない。

ロボットが右に動いたと同時にマタドーラは左へ動きロボットの懐に入りこむ。

ロボットが攻撃しようと左腕を振り上げるが、マタドーラが右手に持っているひらりマントで簡単にかわされる。

マタドーラは左手の剣を持ち直すとロボットの心臓部である場所……頭に剣を突き刺す。

ロボットの動きが止まる。

他数体のロボットも同様に止めに入る。

しかし

「なっ…!?!」

急所にうまくささらなかったのか、さっきのロボットが攻撃して来た。

マタドーラはとっさにひらりマントと剣を離し、ロボットの右腕を掴む。

ロボットは右腕を動かそうとするが、それ以上の力が入っていないらしく中々動かない。

「パワー勝負は、俺の縄張りだ!うおらあ!」

マタドーラが力いっぱいロボットを持ち上げ、他のロボットにむかい、投げつけた。

その衝撃でロボット達は壊れ、動かなくなった。

「…ふう、どうだ王ドラ！」

王ドラの方にむかいピースをするマタドーラ。

「結局は、怪力頼みですか」

「うるせ！さっきはスピード感あったろ！」

「スピード感“だけ”はありましたね」

「なんだと！？」

ケンカが始まりそうになる二人を慌ててドラニコフが止める。

「…そういや、こっちの人間さんは誰よ？」

マタドローラがのび太達を指差す。

「あ。僕、のび太。よろしくマタドローラ」

「僕、スネ夫」

「俺、ジャイアン」

「私、静香」

マタドローラは4人を見ると静香の前に行く。

そして片膝をつき、静香の手を取る。

「こんな素敵なおぜうさんに会えるなんて、俺はなんて運がいいんだ。君に会えた事幸せに思うよ、セニヨリータ」

そう言うとマタドローは静香の手の甲に口付ける。

「「「!!??」」」

のび太達はいき나りの事に思考回路が追いつかないみたいだ。

「!何馬鹿な事してるんですかあああああ!!!」

王ドラがマタドローの頭上に踵落としを決め、盛大な音が響く。

静香本人は何がなんだかわかっていない。

「静香さん、本当すいません！！マタドローはナンパで女の子が大好きなんです！！何か不快だったらマタドローは私がのしてしまつたので私が代わりに謝ります！！」

いや、まずマタドローに謝れよ。

と言いたかったがあまりの威力に誰も何も言えなかったそうなの。

「いえ、マタドローさんがそういう性格だとわかったならいいんです。それより王ドラさんがマタドローさんに謝るべきなんじゃない？」

静香はやっぱりマタドローに謝るよう促す。

「「「（さすが静香ちゃん！）」「」」

「あ、はい…。マタドーラ、起きてください」

王ドラはマタドーラを揺する。

「いてて…なんだよ…」

「静香さんに言われたので謝ります。ごめんなさい」

「へ？あ、ああ…」

いきなりの事に戸惑うマタドーラ。

王ドラは自分の四次元袖からお医者さんカバンを取り出して、マタドーラの手当てを始める。

その間、ドラえもとドラニコフは次の行き先を決めていた。

残す国はあと3つ。

第六話 古代アラビア砂漠伝説のタロット術士 ドラメッド三世（前書き）

擬人化あり。ドラミちゃん出ます。

第六話 古代アラビア砂漠伝説のタロット術士 ドラメッド三世

王ドラがマタドローラの治療をしている間にドラえもんはドラニコフは行き先を決めたようだ。

次の行き先は、サウジアラビア

「サウジアラビアには、どんな親友がいるの？」

スネ夫が興味津々でドラえもんに尋ねる。

「サウジアラビアにはドラメッド三世って言う名前の親友がいるんだ。魔術士で優しいんだけど、怒ると怖い。僕らの保護者みたいな人なんだ」

ドラえもんが説明をすると、次はジャイアンが不思議そうにドラニコフに尋ねる。

「でも、ドラえもん達と年齢は一緒なんだよね？」

「そうじゃないんだ。僕らは色、仕事、性格を考慮して年齢や外観を作られたんだ。ドラえもんは16歳で王ドラは15歳、僕が19歳でマタドローラが20歳ってなってるんだ」

「年齢はバラバラなんだね」

のび太が納得したように呟く。

「ドラメットは22歳。ドラえもんズの中では最年長なんだ」

ドラえもんが付け足すように言うと王ドラが不満そうに口をはさむ。

「なぜ、私は15なんでしょうね。マタドローラよりは年上が良かったです」

「多分、女の子が苦手な動作から幼くしたんじゃないかな？」

ドラニコフが諭すように王ドラを見る。

王ドラは納得がいかないのか、ムッと頬をふくらませる。

ドラニコフは

「仕方ないよ」と王ドラの頭を撫でる。

マタドーラも便乗に頭を撫でようとするが腕をはじかれる。

どうやら、頭を撫でるのを許している人物は限定されているようだ。

「そろそろ行きたいけど…マタドーラ、大丈夫？」

ドラえもんが心配そうにマタドローラを見る。

「ああ、もう平気だぜ」

マタドローラがニツと笑うとドラえもんは安心したのか、タイムマシンの運転席に乗る。

「よし、それじゃあサウジアラビアに行こう！」

のび太が元気よく腕を振り上げる。

「元気だな、のび太は」

隣にいたマタドローラが

「若いつていいねえ」みたいな顔でのび太を見る。

全員を乗せたタイムマシンは多少狭かったが、なんとか乗り込み、出発した。

むかうは砂漠の国、サウジアラビア

サウジアラビアについて一番最初に見たものは一面の砂漠だった

「ここ、本当に誰かいるの？」

のび太があたりを見渡す。どこを見ても砂ばかりだ。

「歩いていけば分かるよ。行こう」

ドラえもんの言葉を合図に全員が歩き出す。

「なあ、ドラえもん。ドラメッドどころかロボットすらいないぜ?」

マタドローラが服につく砂を払いながら言う。

「わかりませんよ。もしかしたら砂の中に隠れてる可能性だってありますからね」

王ドラがそう言った瞬間、砂からたくさんのロボットが現れ、ドラえもん達を囲んだ。

「王ドラの言った事、当たったな」

マタドローラはロボットを見ながら言う。

「のび太くん達を守るんだ!」

ドラえもんが言葉を合図に4人がのび太達を守るよう立つ。

「ちつ、行く先々で飽きねえ奴等だな」

丸いものを見たのか、もう一人のドラニコフになっていて、攻撃体制にはいる。

「早く倒してドラメッドの元へ行きましょう」

王ドラモヌンチャクを構える。

ドラえもんもショックガンを、マタドールはひらりマントと闘牛の剣を構える。

その時、風邪を切るような音がしたかと思うとロボットの頭にタロットカードが刺さっている。

「あのタロットカードは…」

ドラえもん達にはこのタロットカードに見覚えがある。

「みんな、久しぶりであるな」

絨毯に乗って現れたのは桃色の長髪を風になびかせた男。紫の瞳をし、緑の袖の長い上着を着ている。頭には羽の髪飾りをつけたその男はドラメッド三世。

「さて、ゆっくり話したいところであるが…邪魔な物があるであるな」

絨毯から降りたドラメッドはロボット達を見る。

ロボット達は一斉にドラメッドに襲いかかる。

「ドラメッド!!」

ドラえもんが大声を出してドラメッドの元に走ろうとするが、ドラメッドはそれを制した。

「ドラえもん、大丈夫である。この程度、我輩一人で充分である」

そう言いつとドラメッドはタロットカードを取り出す。

ロボット達がドラメッドに攻撃をしようとした瞬間

ロボット達は何故か動きを止める。

そして派手な音を立て、倒れた。

何が起こったのかわからないみんなにドラメッドが笑いかける。

「ドラえもん達はわかってるはずである。我輩が今何をしたのか」

「！タロットカードを正確にロボットの心臓部に投げたのですね」

王ドラがハッとしたように言う。

「いや、待て。どんだけタロットカード強いんだよ」

我にかえったマタドーラがドラメッドに質問する。

「我輩のタロットカードは戦闘用に作った特別製である」

ドラメッドはそれ以上何も言わなかった。

「あ、ドラメッド。ここにいる人達は「知っておる。ドラえもんが世話をしているのび太くんとその友人である」

ドラメッドにはなんでもお見通しだった。

「すごいねドラメッド、なんでもわかるんだ」

のび太が目を輝かせてドラメッドを見る。ドラメッドは苦笑しながら答える。

「いや、ドラえもんがよく話していたのを思い出してな」

「ドラメッドも世話役だから、相談しやすいんだよね」

とドラえもんは言っている。

「さて、残すはアメリカとブラジルですね」

王ドラがメンバーを見ながら国名を言う。

「キッドと、ドラリーニョだね」

ドラニコフはマフラーを直しながら返事をする。

「でも、タイムマシンにこれだけ乗れるかなあ？」

スネ夫が心配そうに全員の顔を見る。

「あ、その件に関しては大丈夫だよ」

ドラえもんがニコツと笑う。

するとタイムホールが開き、そこから女の子が現れた。

金髪のサラサラセミロングに黒目。頭には大きなリボン。ドラえもんと色違いの黄色のパーカーを着て、真っ赤なミニス力をはいている。

ドラえもんの妹、ドラミだ。

「静香ちゃんとスネ夫くんと王ドラとドラニコフとドラメッドはドラミのタイムマシンに乗ってね」

「何故このメンバーなんですか？」

王ドラが不思議そうにドラえもんを見る。

「僕らとのび太くん達とドラミをいたら12人になるでしょ？ドラミの方はあとドラリーニョかキッドのどっちかが乗ればいいしね」

納得、と言ったように王ドラが頷く。

しかし

「ま、待ってください！！私が乗る方には静香さんが……」

「あ、王ドラさんってば、私とミニ子さん以外の女の人ダメだったのよね」

ドラミが困ったように王ドラを見る。

「ドラえもん、ミニ子さんって？」

のび太がドラえもんに耳打ちする。

「王ドラのガールフレンド」

ドラえもんが答えるとビックリしたように王ドラを見る。

女の子が苦手な王ドラに彼女がいるとは思わなかったのだろう。

そして、どうにか王ドラを説得し、タイムマシンに乗る。

二台あるから、アメリカとブラジルに同時に行く事になった。

ドラえもん達はアメリカへ

ドラミ達はブラジルへとむかう事になった。

果たして、二人は無事なのだろうか

第七話 ブラジルの若きスーパーエースストライカー ドラリーニョ（前書き）

前の話より少し短いです。

第七話 ブラジルの若きスーパーエースストライカー ドラリーニョ

ドラミ達は現在、ブラジルにむかっている。

ドラリーニョを連れて来るためだ。

しばらくして、ブラジルについた一同はドラリーニョを探すべく歩き出す。

「探すと言っても、特徴がわからないんじゃないか……」

スネ夫が困ったようにドラミに言う。

「そうねえ……。髪の毛」「わー！……！……！どいてどいてー！……！」

ドラミが特徴を伝えようとした瞬間、どこからか間の抜けたような高い声が聞こえて来た。

声のした方を見てみれば、そこには一人の少年が。

黄緑色の髪を後ろでサッカーボールのボンボンで結び、緑色の大きな瞳をし、サッカーのユニフォームを身に纏う少年だった。

「あ、あの人よ。ドラリーニョは」

ドラミが呑気に指差す。

「危なくないの!？」

静香が不安そうにドラミをみやる。

「大丈夫よ」

ドラミは心配そうな顔すらせずにドラリーニヨを見る。

ドラリーニヨはひたすら走り続けている。後ろには自分を狙うたくさんのロボットが。

そして目の前には親友と、親友の妹、そして見知らぬ人が二人。

ドラリーニヨはあまり考えるのが苦手なために直感で行動する。

ふいに目の前に見えたのは誰かが落としたサッカーボール。

「あれだあ!!」

何かを閃いたのかドラリーニヨはサッカーボールにむかって走り出す。

「とってんぱーの……」

サッカーボールを蹴り上げ、自分も高くジャンプする。

「にゃんぱらり……」

空中でそのまま一回転し、サッカーボールを蹴る。

「シュート……!」

サッカーボールはそのままロボット達にあたり、その衝撃でロボット達は建物にぶつかり、シュートした。

「ゴールだ、ゴールだあ!! やったあ!」

ハシャいているドラリーニヨの元に、六人が駆け寄る。

「ドラリーニヨー！」

ドラメッドがドラリーニヨを呼ぶ。

それに気付いたドラリーニヨは笑顔でドラメッドに手をふる。

「あ、ドラメッド。やつほ」

「ドラリーニヨ、大丈夫ですか？」

王ドラもドラメッドに次いでドラリーニヨに話しかける。

「大丈夫だよ。…あれ？その人達誰ー？」

ドラリーニヨが静香とスネ夫を指差す。

「スネ夫さんと、静香さんよ。忘れちゃダメだからね」

ドラミが念押しして二人を紹介する。

「うん、忘れないように頑張るー」

「ドラリーニヨは、物忘れが激しいんだ」

ドラニコフがスネ夫と静香に耳打ちした。

「なんかさ、みんな弱点つてあるみたいだね」

スネ夫が関心したように王ドラ達を見る。

「まあ、確かに私は女の子が苦手で、ドラメッドは水が苦手、ドラニコフは寒いのが苦手、ドラリーニヨは覚えるのが苦手ですからね」

王ドラが苦笑しながら言う。

「さて、次は22世紀にむかうわよ。お兄ちゃん達の所に行かなきゃ」

ドラミがタイムホールの入り口まで歩きだす。

しかし

「ドラミちゃん！危ない！！」

まだ動けたらしいロボットがドラミを捕まえようとする。

「きゃあっ！！」

「ドラミちゃん！」

ドラニコフがとっさにドラミを突き飛ばし、ドラミは捕まらなかった。

だが、代わりにドラニコフが捕まってしまった。

「「「「「ドラニコフ（さん）！！」「」「」「」

ロボットはドラニコフを捕まえた左腕に力を込めて行く。

「うつ……くうつ……はぁ……苦しつ……」

ギシギシと嫌な音がする。

このままではドラニコフが壊れてしまう。

「ドrameツド、ドラリーニョ、スネ夫さんと静香さんをお願いします」

王ドラはヌンチャクを構え、ロボットの前に立つ。

ロボットはドラニコフを離し、王ドラの方をむく。

「仲間を傷つける者は……私が許しません。さあ、始めましょう」

「王ドラさん……」

その場に座りこんでいるドラミに王ドラは笑顔をおくる。

「大丈夫です。それより、ドラニコフをお願いします」

笑顔をむけた後、王ドラは再び厳しい顔つきでロボットを見た。

第八話 氷の大地ロシアさすらいの狼男 ドラニコフ（前書き）

暗め

グロテスク表現、とまではいかないような表現があるので注意。

第八話 氷の大地ロシアさすらいの狼男 ドラニコフ

ロボットと対峙する王ドラ。

周りには緊迫した空気が流れる。

先に動いたのは王ドラ。

ヌンチャクをふりかざし、ロボットの左腕を攻撃する。

しかし、軽くヒビが入った程度で致命傷にはならない。

次に動いたのはロボット。

王ドラを捕まえようと両腕で攻撃してくる。

そこは小柄で身軽な王ドラ。

軽やかにかわしていく。

どちらも互角の勝負がしばらくの間続いた。

その時、ロボットがある行動に出た。

なんと、静香達の方にむかい腕を伸ばしたのだ。

王ドラは触れさせまいと静香達の前へ飛び込み、腕を封じた。

しかし、ロボットは片方の腕で王ドラの足を掴む。

そのまま宙吊り状態にされる王ドラ。

「くっ……」

「「王ドラ!!」」

ドrameッドがタロットカードを、ドラリーニョがサッカーボールを構える。

しかし、ロボットは王ドラの左足を掴んでいる腕に力を込める。

しばらくして

バキッ

ロボットは興味がなさげに王ドラを放り投げようとした。

しかし、王ドラの足を掴んでいた腕はなかった。

後ろを振り向けば、王ドラを抱き抱えたドラニコフの姿があった。

ロボットの腕は地に落ちていた。

ドラニコフはうつむいていた。

王ドラは、あまりの激痛により気を失っていた。

折られた左足は力なくダランとしていて、少し変に折れ曲がっている。

ドラニコフはそっとドラミの傍に王ドラを寝かせる。

その目は、もう一人のドラニコフ

「…頼む」

それだけ言つとロボットの傍まで歩いて行く。

「まさか、お前みたいな雑魚に腹が立つとは思わなかったぜ。…ま、もう一人の俺でも腹が立つてるだろうよ」

ドラニコフは、まだ残っているロボットの腕を掴む。

「テメエ…よくも王ドラの足、折ってくれたな。この罪、かなり重いぜ。だから…テメエをバラバラにしてやらあ！！！」

その言葉と共にロボットの腕を無理矢理引き千切るドラニコフ

そのまま頭上に乗る、右手を構える。

別人格になったドラニコフの爪は鋭くかたい。

厚さ数十cmの鉄板も簡単に貫くほどに。

「俺の親友の足を傷つけた代金だ。しっかり払えよお!!!」

ドラニコフはロボットの頭上に右手を突っ込み、そのまま手でメイ
ンコンピュータを破壊した。

ロボットはそれきり動かなくなる。

「まったく……意外に固い奴だったぜ」

「「王ドラ！」」

ドラマメッド達が慌てて王ドラの方へむかう。

「王ドラさん！しっかりして！」

「死んだら嫌だよ！王ドラ！」

静香とスネ夫が必死に呼びかけるが王ドラは反応しない。

「…まずは22世紀に行くのである。ここではどうしようもないである」

ドラマメッドは少し考え、22世紀へむかう提案をした。

他に意見もなく、6人はタイムマシンに乗り、22世紀へむかった。

タイムマシンの中で、少しでも痛みを和らげるために静香が応急処置をしていた。

スネ夫とドラリーニヨは心配そうに王ドラを見る。

運転しているドラミの手は震えていた。

ドラメッドは、ドラニコフを見る。

ドラニコフはまだ別人格の方だった。

「変わらないのであるか？」

「今変わってどうする。…あいつ、自分のせいだって抱え込んでる。こついう事が長く続きそうだろう？だから、あいつの変わりに俺がずっと出ていてやるんだ」

ドラニコフは悲しげな目で自分の服の裾を握る。

「……………辛いであるよ」

「…辛い思いをするのは、俺だけでいい。あいつにはあじあわせたくはない」

それ以上、会話はなかった。

目指す先は未来の故郷

2
2
世紀

第九話 ミスターアメリカンドリーム正義の熱血ガンマン ドラ・ザ・キッド

アメリカへ行ったドラえもん達。キッドは果たして無事だろうか。

第九話 ミスターアメリカンドリーム正義の熱血ガンマン ドラ・ザ・キッド

ドラえもん達を乗せたタイムマシンは、開拓時代のアメリカへとむかっていた。

開拓時代のアメリカは、人一人すらない程寂れていた。

恐らく、この街でシェリフを務めるドラ・ザ・キッドが皆を避難させたのだろう。

「ドラえもん、キッドってどんな人なの？」

のび太が、ドラえもんに尋ねる。

ドラえもんは振り向き、少し間をおいてから話す。

「ん〜とね、ガサツで短気だけど明るくてちょっとお調子者かな？」

あ、あとドラミの彼氏」

「ドラミちゃんのかよ！？…まさかドラえもん、交際認めてないからこつちにドラミちゃんをよこさなかったんじゃない？」

ジャイアンが恐る恐るドラえもんを見る。

「違うよ！キッドはドラミの事大切に思ってくれてるから認めないなんて事はないよ！でも、キッドのいる場所は危ない街だからブラジルに行ってもらったんだよ！」

確かに、キッドのいる街は、いつ流れ弾で死んでもおかしくない街だ。それを考えてブラジルに行かせたのは賢明だろう。

「しかし、ドラえもん。キッド、ここいらにはいないみたいだぜ」

マタドーラがあたりを見渡す。

あたりには人の気配がしない。

「街の奥の方から何か音がするよ。行ってみよう」

ドラえもんの言葉を合図に街の奥へと進む。

するとそこには

「ドカーン！ドカーン！……くそ、キリがねえ」

ロボット相手に一人で戦う男がいた。

金髪の髪に青い瞳、黒のウエスタンハット。白のTシャツの上には星条旗を模したベスト。青のジーンズにブーツといったウエスタンルックの青年は、左腕に空気大砲をつけ、ロボットに攻撃している。

彼こそが、ドラ・ザ・キッドだ。

「苦戦してるな、キッドのやつ…」

マタドーラがロボットの数を見ながら呟く。

「…！ドラえもん！ショックガン貸して！」

何かを考えたのか、のび太はドラえもんからショックガンを借りる。

のび太はショックガンを使い、次々とロボット達の急所、頭を撃つていった。

突然の誰かからの助太刀に戸惑うキッド。

ロボットが全て動かなくなるのを見ると、ドラえもん達はキッドに

近寄る。

「キッド！大丈夫？」

「ドラえもん！ああ、大丈夫だぜ」

ドラえもんの質問に笑顔で答えるキッド。

「キッド、のび太に感謝しろよ。助太刀したのこいつだからな」

マタドーラがのび太を指差す。

「お前だったのか！サンキュー」

「ううん、役に立ってよかったよ」

キッドから感謝の言葉をもらい、少し照れるのび太。

「他の奴等は？」

キッドがキョロキョロと周りを見る。

「大丈夫だよ、他のみんなはブラジルに行ってドラリーニョを呼びにいつてるから」

「そっか、なら安心だな」

キッドは安心したように空気大砲を四次元ハットに戻す。

その時だ

「ドラえもん、キッド。親友テレカが」

マタドーラが自分の親友テレカを出す。

親友テレカは、光っていた。

「どうしたんだ、いったい…」

『みんな、大変である！！』

どうやら、連絡のようだ。

ドラメッドの声が聞こえる。

しかし、いつものんびりとした声ではなくどこか切羽詰まっていた。

何事かと思い、皆静かになる。

次の一言で、全員に衝撃がはしる。

『王ドラの足が、ロボットによって折られたあーる……！』

第十話 病院には知り合いが（前書き）

オリジナル設定、キャラあり。

今回はマタドーラの彼女が出ます。

第十話 病院には知り合いが

「「「王ドラの足が折られたぁ!!??」「」」

「そうである！今我輩達はミニ子殿が働いている病院にいるのである！すぐに来てほしいである」

連絡が終わり、親友テレカをしまう3人。

「急ごう!!王ドラが心配だ!」

ドラえもんの言葉を合図に、みんなタイムマシンに乗り込む。

行き先は、ミニ子の働いている22世紀の病院

一方、22世紀のとある研究所では

「心配…か…フン、くだらない」

黒髪ショートヘアの目付きの悪い少年がドラえもん達の様子を監視していた。

「ま、一人はもう僕の手の中にいる…。せいぜい騙されるんだね」

意味深な言葉を残し、少年はモニターを後にした。

22世紀についたドラえもん達は急いで病院に来た。

中に入ると、ドラミがいた。

「ドラミ…」

「キッド…無事だったのね」

キッドの姿に安心したのか、キッドに抱きつくドラミ。

「お前も無事でよかった。……………王ドラは…?」

キッドが尋ねると、ドラミは辛そうな顔つきになる。

「今は…眠ってる。…足のスペアが見つかるまで時間がかかるみたいなの…」

言葉を発するドラミの体は震えていた。キッドは優しく背中を撫でてやる。

「大丈夫だろ、王ドラなら。……ここにいるの、お前等とミニ子だけか？」

病院の中は、とても静かで誰もいないと思う程だ。

「ううん、ノラミヤー子さんやモモさん…他に何人かいるわ」

「ノラミヤー子さんにモモちゃん…か。あとは、みんなのガールフレンドかな」

ドラえもんがドラミに聞くとドラミは首を縦に振った。

ドラミの案内でまずは王ドラのいる場所へとむかう。

「マタドローっ！..!」

ふいに、マタドーラの名を呼ぶ声。

後ろを見ると一人の少女が立っていた。

茶色の髪にウェーブをかけ、後ろでひとまとめにしたオシャレな髪型。やや大人びた顔つきに白のYシャツ、ミニスカをはいてヒールのサンダルを履いている少女。

腰に巻いているベルトにはハサミやブラシ、ピンが入ったポーチがついている。

マタドーラのガールフレンドで美容師のリンスだ。

「おまつ…リンスか。なんでここに？」

「中心街の方じゃ危ないのよ。私の店、街の真ん中だし。だから、ミニ子に呼ばれて此処に来たのよ」

リンスが驚くマタドローラに説明する。

「なるほどな…。…怪我、してないか？」

マタドローラがリンスの手をとる。

いくら女好きなマタドローラでもガールフレンドにはやはり普通の女の子と接し方が違う。

「してないわ。……アンタは？」

「俺？足をちよつとばかし」

軽く笑いながら、怪我した場所を見せる。

「普段昼寝してるから、そういう目にあつのよ」

「ドラえもん、なんかリンスさんマタドローに冷たいね」

のび太がドラえもんにとつと耳打ちする。

マタドローはそれを聞いていたのかこちらに向き直る。

「お前等わかってねえなあ。リンスはアレだ、ツンデレ属性なんだよ。普段は嫌味やら罵倒やらがめちゃくちゃ多いけど、二人きりでいるときはそれはもう…」

そこまでいいかけて、マタドローはリンスに蹴られた。

リンスはそれだけ言うつと踵を返して別の場所に行った。

「リンスの奴…そんなに恥ずかしいのか。可愛い奴だな」

「お前の言動のが恥ずかしいよ」

復活したマタドーラにキッドの最もなツッコミがいる。

「さあ、王ドラの部屋へ」

目的を思い出して、再び部屋へ向かう。

王ドラの部屋の前へつくと、ドラニコフがいた。

「ドラニコフ！…王ドラはこの部屋か？」

ジャイアンがドラニコフに尋ねる。

「ああ、この中だ」

早く行ってやれと言われ、中に入る。

中に入ると黒髪を二つに結び、ナース服を着た少女 ミミ子^{ミミ子}がいた。

「ミミ子さん、王ドラの様子は…?」

次の瞬間、ミミ子の口から信じられない言葉が

「王ドラさんの足のスペア……工場が襲われて、作れないみたいなんです」

第十一話 いざ、工場へ（前書き）

ドラニコフのもう一つの人格には名前が…

そして工場へいくのはあの三人！

第十一話 いざ、工場へ

「作れないって……」

絶望的な言葉。

作れないなら、王ドラの足は当分治らない。

しかし、ドラえもん達には王ドラが必要だ。

どうしたらいいかと考える一同。

少しして、ミニ子がハッとしたように口を開く。

「そうだ！確かその工場には部品だけならたくさんあります。足の部位の部品もあるはずなんです。それさえあれば、王ドラさんの足は治せます！-」

「でも、それは組み立てなきゃダメなんじゃないのか？」

マタドローラが尋ねる。 ミミ子は首を横に振り、続けた。

「私を嘗めないでください。 部品さえあれば、絶対に治して見せます」

「じゃあ、問題は誰が行くか…… 「俺が行く」

ふいに、ドラえもんの言葉を遮る者がいた。

ドラニコフだ。

「その工場から取ってきてくりゃいいんだろ。俺が行く」

ドラニコフはミミ子に再度確認を取り、扉に手をかける。

「ま、待って！一人じゃ危ないよ。ドラニコ…」「月夜だ」

のび太の言葉を遮るドラニコフ。その口からは謎の名が。

「げっ……や……？」

「月夜はドラニコフが俺につけた名だ。あいつ、俺は自分とは違う人だからって名前をつけたんだ」

「じ、じゃあ月夜さん。一人じゃ危ないよ」

のび太はドラニコフ、もとい月夜の服の裾を引っ張る。

「だが、誰かが行かないと王ドラの足は治らないだろ。俺は一人でも平…「待って!!」」

突然、扉が開きドラリーニョが入って来た。

「僕も行く!王ドラの足、治してあげたいもん!ね、ダメ?ドラニコフ…………。あ、違った。月夜だね」

月夜のマフラーを引っ張り、上目使いで見上げるドラリーニョ。

もう一人の彼、ドラニコフもそうだが月夜は上目使いに弱い。

「…はあ、わかったよ。行くぞ、ドラリーニョ」

「うん!!」

ドラリーニョと月夜が病室を出ていくのを、のび太はただボンヤリと見ていた。

そののび太を見ていたキッドは、ふいに四次元ハットに手をかける。

「のび太」

キッドはあるものを、のび太に渡す。

のび太が渡されたのはショックガン。

「キッド……」

「二人をほっとけねえんだろ。行つてこい」

「……………うん、ありがとう!」

のび太はキッドに礼を言々と病室を出ていった。

「二人共! 待って!」

病院の外に出たばかりの二人を呼び止める。

「はあはあ……………僕も行く。…二人の足、引つ張っちゃうかも知れないけど……………やっぱり、見てるだけじゃ嫌だから……」

ドラリーニヨは月夜の顔を見る。

連れて行くのかどうするのかが気になるらしい。

「覚悟、出来てるんだな」

「…うん！」

月夜はそれだけ言つとのび太の頭に手をおく。

「危なくなったら、俺かドラリーニョの後ろに隠れる。俺等からは離れるな。もし守りきれなかったらドラえもんが後からうつるさいからな…」

月夜は、ドラえもんに対する恐怖を思い出しながらも無事了解してくれた。

ドラリーニョは、心なしか嬉しそうだった。

「じゃあ、一緒に行こうね！ーえーっと……」

「のび太だよ」

「うん、のび太くん！行こう！ー」

ドラリーニョに手をひかれながら、歩き出すのび太

月夜は苦笑しながら後を追う。

目指すは、ロボット修理工場

第十二話 裏切りのガールフレンド（前書き）

工場に来たのび太、ドラリーニヨ、もう一人のドラニコフ 月夜。
しかし、そこにいた敵は、ある親友の彼女であった。

第十二話 裏切りのガールフレンド

のび太と月夜、ドラリーニョはとある工場の前に立っていた。

ここには王ドラの足のパーツを取りに来たのだ。

「中にまだロボットがいるかも知れねえから気をつけろよ。…特にドラリーニョ」

月夜はドラリーニョの方を見るがドラリーニョはすでに中にむかつて走っていた。

「…月夜…。ドラリーニョが先に……」

「追え！追うんだ！！アイツを野放しにしてたら確実に厄介な事に……」

そう言っ慌てて走って行く月夜。

のび太もそれに続いた。

「あれー？二人はどこだろ」

ドラリーニョはもう工場内で迷っていた。

「あれ？僕何しに来たわけ？」

そして目的すら忘れていた。

「ん〜と……。ま、いいやー!」

忘れてしまった事をあまり深く考えないドラリーニョはサッカーボールを取り出しサッカーのドリブルを始めてしまった。

そんな彼を遠くから見ている者がいた。

「ドラリーニョ!」

やっとドラリーニョを見つけた月夜とのび太。

「あ、二人共。何してるの?」

「それは、こっちのセリフだよ。いきなりいなくなるんだもん」

のび太が肩で息をしながら言う。かなり走ったのだろう。

「足のパーツはこの先にあるはずだ。さっさと…
」その必要はないですよ」

突如聞こえた少女らしき高い声。

振り向けば一人の少女が立っていた。

濃い緑色のショートヘアに大きな丸眼鏡。フリルやリボンをあしらった可愛い服を着た少女だった。

頭には音譜を模した髪止めをしている。

「あー、シキちゃん！」

ドラリーニョが少女…シキを指差して言う。

「シキ…ちゃん？」

「…ドラメツドのガールフレンドの指揮者ロボットだ」

月夜がシキを見ながらのび太に説明する。

「お久しぶりですねえ　ドラリーニョくん………月夜くん」

無邪気な笑顔で歩み寄ってくるシキ。しかし

「来るな」

月夜は一言言っつて鋭い爪をシキにむける。

「月夜？」

のび太が驚いたように月夜を見る。

「ど、どうしたんです…
「なんでここにいる」

シキを睨みつけたまま言葉を遮る月夜。

「……！あ、ここ危ないロボットがいるんだよね！でもシキちゃん、
なんでいるの？」

ドラリーニョが思い出したようにシキに尋ねる。シキはうつむいた
まま何も言わない。

それは、光を宿さない濁った瞳に、歪んだ笑みだ。

「貴方達。たった三人で来るとはおろかですねえ……。必要がないと言ったのはここが貴方達の墓場になるからでーす」

いつもと同じ、能天気な口調と共に現れたのは何十体ものたくさんの戦争ロボット達。

「足のパーツを持っていかれて、王ドラくんの足が治るのは厄介ですからー……」

「今ここで死んでくださいね」

第十三話 発掘と争い（前書き）

襲いかかるロボット達。闘うドラリーニョと月夜。そんな中、のび太はある物を発見する…。

第十三話 発掘と争い

「今ここで死んでくださいね」

その合図と共にロボットがのび太達に襲いかかる。

ドラリーニョは咄嗟にのび太の手をひいて走り出す。

月夜は爪、蹴りを使いロボットをなぎ倒して行く。

「ドラリーニョ！月夜が危ないよ！！」

のび太は月夜の方を見て言う。

ドラリーニョはのび太をある部屋に入れる。

「……で待ってて……!」

ドラリーニヨはそれだけ言つと戸を閉めた。

のび太は部屋の中を見渡す。

中は部品の倉庫らしい。

ここに王ドラの足のパーツがあるかも知れない。

そう思ったのび太は倉庫の中を探し始めた。

「くそっ…キリがねえな…」

一方こちらは月夜のいる場所。

何体もロボットがいるせいか、月夜は疲れ始めている。

「フフ、どうしたんですかぁ？」

その様子を楽しそうに見ているシキ。

その時

「シュ~~~~~ト!!!!!!!!!!」

サッカーボールがシキの頬をかすめる。

「……………なんですか」

シキは冷たい目でサッカーボールを蹴った本人
ヨを見る。
ドラリーニ

「君は、シキちゃんじゃない！！シキちゃんはいつもドラメツドの傍にいて、ニコニコしてて、優しくて………そんなシキちゃんはシキちゃんじゃない！！」

ドラリーニヨは、足りない頭で精一杯言葉をつむいだ。

「…残念ですが、私は私です。ドラリーニヨくん、貴方も死んでも
らいますよ」

シキの合図で再びロボット達が襲いかかる。

「負けないもん!!」

「そう簡単にやられてたまるか!!」

一方のび太は倉庫をまだ探していた。

「見つからないなあ…」

以前、ドラえもんのようなロボットの体のパーツの名称を教えてもらっていたため、のび太はどんなものはわかっている。

しかし、中々見つからない。

あきらめかけたその時だった。

埋もれていた中に、一つの箱を見つけた。

その箱に書かれていた文字は

“元猫型ロボット 現人型ロボット専用部品 足”

のび太の探しているものだった。

「これなら…王ドラの足が治る!!」

のび太は嬉しそうに箱を抱え、部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1925d/>

孤独な少年VSドラえもんズ

2010年10月15日18時47分発行